2019 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

拉加本

１．事業実施の目的

中国青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷ボンコル村において山神を祀るラプツェ祭に関してフィールド調査を行い、ボンコル村の 3 種類の山神の位置付けや伝説、役割などを明らかにするためのデータを収集

２．実施場所

中国青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷ボンコル村

３．実施期日

2019 年 5 月 1 日（水）～2019 年 5 月 17 日（金）

４．成果報告

●事業の概要

2019 年 5 月 1～17 日（旧暦 3 月 27 日～4 月 13 日）、調査村の重要な信仰対象であるアニェジュリという山神のラプツェ（堆石塚）祭とアマ・スメという山神のラプツェ祭について短期のフィールド調査を実施した。本調査では、現地の人々が「ラプツェ・トッパ」と呼ぶ山神祭礼行事のプロセスと意味、山神の役割などについて参与観察し一次資料を収集した。また、現地の長老たちに聞き取りをし、ボンコル村の 3 種類の山神の位置付けや伝説、役割などを明らかにするためのデータを収集した。調査により、以下のことを明らかにすることができた。

１）尼寺とアマ・スメのラプツェ祭

2019 年 5 月 14 日（旧暦 4 月 10 日）、ボンコル村のディチェン・シェラプ・タルチィンリン（bDe chen shes rab mthar phyin gling）という尼寺を訪ね、尼寺近くに所在するアマ・スメが祀られたラプツェを中心にフィールド調査を実施した。

尼寺はボンコル村の中心地から 7km 離れたところにある。2014 年に当村出身の学僧リンチェン・サンポ（Rin chen bzang po）が創建した新しい寺院であり、現在尼僧が約 30 人に在籍する。アマ・スメのラプツェは尼寺の北にある山腹に建てられており、尼寺から歩いて約 20 分のところにある。

今回のラプツェ祭に参加した人数は約 40 人であり、その内女性 2 人、尼僧約 15 人、男性約 23 人を占める。尼僧を除く全員は、ボンコル村のギャシュク・ツォワ（家系）の人である。午前 9 時、ラプツェの前に設置されている供物台の火にオオムギの粉、ハダカムギをくべてアマ・スメに捧げた（写真１）。その後、尼僧は一カ所に座り、アマ・スメの祝詞を唱え続け、参拝者皆が自らの祈願を唱えながら、持ってきたヤナギの枝で作られた矢、矛、剣などをラプツェに刺し、ヒツジの毛でできた紐（ムタック）をラプツェの帯として右巻きに結びつけた。アマ・スメは女神であるため、ラプツェ祭に女性も参加でき、女性の木とされ

るヤナギの枝で作った矢が使用できる。

アマ・スメはモンゴルの 13 人の子を持つ女神であるといわれているので、「13 のスメ母子（Su me ma bu bcu gsum)」とも呼ばれており、13 人の子を祀る小さいラプツェが、アマ・スメを祀るラプツェの横に並ぶ。1958 年までアマ・スメのラプツェ祭は、貴南県ラプウック郷のダシ村とボンコル村の主にギャシュク・ツォワの人々が、旧暦 1 月 1 日に開き詣でてきた。文化大革命後、同ラプツェを再建することになったが、ダシ村とボンコル村の仲が悪くなり、それぞれラプツェを再建して現在に至る。ダム建設の影響で 2016 年に、ボンコル村のギャシュク・ツォワ出身の学僧リンチェン・サンポが尼寺近くにアマ・スメのラプツェを移築し、旧暦 4 月 10 日に祭を開くようになった。

図 1　アマ・スメのラプツェ祭（報告者撮影）

昨年までこのラプツェ祭は、ボンコル村のギャシュク・ツォワの人々だけが参加してきたが、今年はリンチェン・サンポがアマ・スメは村人全員の信仰対象であり、皆が参加すべきだと主張した。しかし、5 月は冬虫夏草を取るなど出稼ぎに出ている人が多かったため、参加した 40 人のほとんどはギャシュク・ツォワの人々であった。

２）　アニェジュリのラプツェ祭

2019 年 5 月 15 日（旧暦 4 月 11 日)、ボンコル村のアニェジュリ(A myes sgro ri）という山神のラプツェにおいて祭が開かれ、その儀礼について参与観察、聞き取りなどの調査を実施した。

アニェジュリに対してボンコル村の人々は「千人のボン教徒と百人の仏教徒の守護神」と表現して仏教徒とボン教徒が共に崇拝し、年 2 回（春の 4 月 11 日と秋の 7 月 19 日）祭礼を行ってきた。秋のラプツェ祭については、既に 2018 年に調査を実施し、一部のデータを収集することがきたが（平成 30 年度学生派遣事業調査レポート HP を参照)、今回の調査は春のラプツェ祭に関するものだった。

5 月 15 日、ボンコル村の中心から約 53km 離れたジュガン山山頂にあるアニェジュリの

ラプツェにおいて、春のラプツェ祭が行われた。仏教徒とボン教徒を問わず村の男性のみか約 110 人参集した。矢、矛、剣などを堆石塚に飾り、祝詞を唱え、カタックを掛け、ロンタ(風の馬)という旗を飛ばし、布に経を刷ったタルチョクをつけた。春の儀礼も秋のそれとプロセスはほぼ同じであったが、春の祭礼ではウンジョクパ（供養会）という儀礼がラプツェ祭と同時に行われることが特徴的だった。

ウンジョクパとは天竜八部衆（①天、②竜、③夜叉、④乾闥婆、⑤阿修羅、⑥迦楼羅、⑦緊那羅、⑧摩喉羅伽）に対して、大麦粉を捏ねて作ったトルマという供物を捧げ、宴会を行い、天や竜などの神々を喜ばせる儀礼である（図２）。ボンコル村およびこの周辺地域の人々は、大雨による洪水災害や、家畜の死・病、農作物の雹被害などの災難は、天竜八部衆が相互に争うことによってもたらされると考える。死んだ家畜は八部衆のものとなり、災難で亡くなった人間は八部衆の家来として連れて行かれたのだとされる。そのため、天竜八部衆による災難を防ぐため、年に一度、ウシやヒツジなど動物を模したトルマを供物台の火にくべる。これがウンジョクパである。

ウンジョクパが開かれる場所は確定していないが、ラプツェ祭とともにアニェジュリのラプツェがあるジュガン山山頂で行われたり、農耕地付近のアニェユラ廟やマニ堂などで行われたりしている。

図 2　天竜八部衆供養会（報告者撮影）

以上のように、本調査ではアマ・スメとアニェジュリのラプツェ祭に関して調査し、ボンコル村の山神の位置付けや伝説、役割などを明らかにするデータを収集することができた。

●本事業の実施によって得られた成果

本調査では、ボンコル村で行われるアマ・スメとアニェジュリのラプツェ祭を中心に山神儀礼に関する参与観察と聞き取り調査を行い、博士論文執筆にあたって手薄なデータ補充でき、ボンコル村における山神の伝説と変容、役割、意味が明瞭となるデータが収集するこ

とができた。これらのデータの一部を整理し、2019 年 6 月 1 日〜2 日に東北大学で開催された日本文化人類学会第 53 回研究大会において「中国チベット・アムド地域における仏教、ボン教、道教などの混淆的宗教実践―青海省海南チベット族自治州貴南県砂溝郷ボンコル村の事例から」というテーマで研究発表を行った。そこで得られた多くの貴重なコメントや助言を活かしつつ、本調査で得られたデータを分析して加え、今年の 7 月 7〜13 日にフランスのパリで開催される第 15 回国際チベット学術会議(International Association for Tibetan Studies, 15th IATS2019)において「混淆する宗教実践とその社会背景に関する研究―青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から」というテーマで研究発表する予定である。

これらの発表原稿を学術論文にまとめて『総研大文化科学研究』や『比較民俗研究』などの雑誌に投稿することを目指す。また、一部のデータを『民博若手研究者セミナー』や『総研大文化フォーラム 2019』などの学術会議で口頭発表を行う予定である。

●本事業について

このたび、学生派遣事業の援助をいただき、博士課程の調査研究をできたこと、心から感謝の意を表す。現地調査を重視する文化人類学専門の学生にとって、学生派遣事業の助成は極めて重要かつ有益な事業であるため、今後とも継続されるようお願い申し上げたい。誠にありがとうございました。